

ふりさけ見れば

(567)

安部龍太郎
西のぼる画

「これが三国時代の書物か」

今上(光仁天皇)は六十三歳になられる。昨年即位が決まった時には、ご高齢を危ぶむ声もあったが、先帝と真備は朝家の安定のために後継者と定めたのだった。

「わが国のことが記されているのは、第三十八巻だけでございます。他の巻は安祿山の乱の混乱の中で失われました」

「さようか。朝家と日本国のために身命を賭して働いた者たち。中でも吉備右大臣と阿倍仲麻呂には感謝と敬意を表する」

「有難きお言葉、皆と共に深く感謝申し上げます。お言葉に甘えて、ひとつお願いがございます」

「申すがよい」

「わが国との交易を望んでいる唐の商人がおりますので、長門と筑前での交易と居住をお許しいただきさうございます」

「右大臣が見込んだ者なら間違いあるまい。そのように計らうがよい」

今上の許しを得て、真備はさっそく担当の役所に手続きを命じた。これは春燕の父石皓然が、昔から望んでいたことでもあった。



この仕事を最後に真備は右大臣を辞吉備で隠棲することにした。時に七十したのはそれから四年後である。

生まれ在所の箭田(岡山県倉敷市真備の身を養う静かな生活で、気が向いた川ぞいの大きな岩に座って琴を弾いたの山と眼下を流れる清流をながめな一生に思いを馳せていたのである。

真備町ではこの故実にちなみ、毎年この頃に「吉備真備公弹琴祭」がもよおす。真備が琴を弾いていた岩は琴弾き岩、祭の日には郷土の偉人を偲んで琴こなわれる。

真備が光仁天皇に献上した『魏略第が、その後どうなったのか分からないには楊貴妃に対する信仰が長く受け継いで、皇室の菩提寺である京都の泉涌寺貴妃観音がまつられている。

その理由が奈辺にあるか、史書はついでない。